

■第2章 古香取海（こかとりのおうみ）と滑石（かっせき）■

古墳時代の常総（じょうそう）地域では、現在の霞ヶ浦（かすみがうら）、利根川（とね）、印旛沼（いんばぬま）などが、ひとつの巨大な内海を形成していました。

展示では便宜上、「古香取海」と呼んでいます。

常総地域は、古香取海と東京湾、ふたつの巨大な水域を中心に、湖沼や河川を介して、各地がゆるやかに結びついていた地域です。

陸路が十分に整備されていない当時、巨大な水域は、人や物資が活発に行きかう、交通の要衝でした。

この地域で発達した常総型石枕には、滑石や蛇紋岩（じゃもんがん）など、やわらかい石材が使われました。

関東地方では、群馬県と埼玉県の間境付近や、茨城県の北部などで採集することができる岩石です。

常総地域では、それら地域の首長たちから入手した石材を、古香取海や河川を使って運搬し、運び込んだ工房で、石枕や石製模造品などを作っていたと考えられています。